

りして、引揚者としてはもったいないくらいの生活をさせてもらった。

父が無事に帰って来て、父の実家の物置を改造して、それなりの生活ができるようになった矢先に、母は病いに倒れてしまった。父は村の農協に職を得て、わずかながら収入もあるようになったが、それでも生活は苦しかった。そのような中で、母は四十九歳の若さで死亡した。これから少しでも楽をしてというときだった。人生の最後は「苦患の苦死」とも言えるものだった。かつては、みんなから「満州の姉さんは、幸せでうらやましい」と言われていた母だったが、すべては戦争が運命を変えてしまったのだ。でも、母は肉親たちの温かい愛に包まれて、感謝しながら旅立ったことと、私は信じている。楽な暮らしではなかったが、理解ある叔父、叔母の勧めで、「身につく財産を」とのことと、弟たちは苦学をしながらも、それぞれ大学まで進み、現在は安定した生活を幸せに過ごしている。

私は、幾度かの運命の分かれ道乗り越えて帰国し

て以来、関わりがあった多くの方々に助けられて、現在に至っている。そして、微力ながら地域社会の福祉のお役にも立つことができ、毎日の幸せに感謝して過ごしている。

半世紀を振り返って

神奈川県 織田 郁夫

昭和二十（一九四五）年八月十五日、私は中国東北、いわゆる満州国四平市の満鉄社宅の一室にいた。道路一つ隔てた向こう側には、重大犯罪を犯した中国人だけが収容されている監獄がある。足に鎖をはめられたまま作業をしている囚人たちの姿が、鉄格子の扉の隙間からちらりちらりと見えるし、監獄の周りには朝鮮人や中国人の部落が入り交じって所在していた。私は、そんな環境の中にある平屋建ての満鉄社宅で、雑音がひどくて何を言っているのかよく聞き取れないながら、重大放送を聞いていた。放送されていた

のは「終戦の詔勅」だとあとで分かった。

それからしばらくたって、内地への引揚げの話が持ち上がった。その内容は、「一切の家財道具をそのまま残して、着の身着のままリュックサック一個だけを背負い、四平駅広場に集合せよ」というものであった。駅前広場には続々と日本人が集まってきた。

しかし、いつまでたっても列車は来ないし、どこからも指示が無く、日も暮れてきたので、だれ言うともなく、「今日はこのまま、一度自宅へ帰ろう」ということになった。なにかキツネにだまされたような、変な一日だった。だがこの日、四平駅から出発しなかったからこそ、私たちは後日無事に日本の土を踏めたのである。日本が戦に負けた時点で今までの強大な権力が無くなったのだから、引揚専用列車の運行手配などできるはずがないことに考えが及ばなかったのである。

私たち日本人が、四平駅広場に集合していた間に、中国人たちが我が家の中に侵入して、家財道具を略奪しなかったのが不思議なくらいであった。それだけまだ少しは日本が支配していたときの影響力が残っていた

か、敗戦に関する情報が極端に少なかったもので、中国人にもわかには信じられなかったのではなからうか。

ここで、なぜこの変な一日が私たちに幸いしたのか、私たちより早く日本に向かった引揚列車で、実際に起こった事件を紹介しておきたい。そのことは、四平小学校で低学年の児童を担任しておられたN先生が、四平会報に書かれた記事に残されている。

N先生は結婚されたので、教職を辞任して新京（長春）に移転されたが、敗戦の知らせがあったあと、やはり日本人仲間から新京駅前広場に集合するようにとの指示を受け、赤ん坊を背負って広場に行った。駅で一晩野宿して、翌朝準備された引揚列車に乗り、列車は朝鮮半島に向かって南下を始め、四時間ほどかかって四平駅までたどり着いたのである。そこで、N先生は四平に住んでいる両親のことが気になって、駅員に聞いてみたら「四平在住の日本人は、まだだれも引き揚げてはいませんよ」と言われた。それを聞いたとたんにN先生は、虫の知らせというか、一緒に乗ってきた知人、友人が引き止めるのを振り切って列車を降

り、四平に住んでおられたご両親を訪ねたのである。

私たち親子と両親とが一緒に生きて日本に帰れたのは、駅員の話聞いて列車を降りたからだと言われている。この次第は以下のようなものであった。先生が降りた引揚列車には、約二千人ほどの日本人引揚者が乗っていた。四平を出てしばらく走ってから突然列車が止まり、暴徒に襲われ持ち物すべてを奪われたあげく、列車を降ろされてしまったのである。どことも分からない土地に放り出された乗客はどうすることもできず、病気にいかかったり、事故にあったり、食糧が無くなったたりして多くの人がその土地で亡くなられたというのである。N先生も日本に引き揚げてから、たまたまこの列車の事件のことを聞かれて知ったとのことであった。

私たち四平在住日本人も、集合した四平駅で引揚列車が編成され出発していたならば、N先生が四平駅まで乗ってきた列車と同じような悲惨な目に遭って、真っ暗な地獄に転げ落ちたであろうことは間違いない。あのときに見た悪い夢は、本当はよい夢だったの

である。いろいろと変な情報が乱れ飛んでいた時期であり、混乱を極めていた時代であった。

昭和二十年八月、不法にもソ連軍が参戦し、ソ満国境を突破して南下してきた。都市部以外の満州奥地の開拓地や、山林の造営作業に従事していた多数の日本人や満鉄職員、市民などは、ソ連軍の不意打ちを受けて身一つで逃げ惑い、生死のふちをさまようことになった。その当時、男性は皆兵隊にとられ、残っているのは老人と女、子供だけであった。私は四平にいたとき、奥地から避難してきた日本人の集団を見ている。着の身着のままの老人や障害者、女、子供たちがよろよろと歩きながら四平の街に入ってきた。彼らは疲れた体を休めるために、空いている学校や、寺院、公会堂などに入って行った。その集団の中から、中国残留孤児が生まれたのである。自分の身さえ持て余すほどの状況で、とてもこれから先、子供たちを連れていく気力も食糧もなかったのだ。子供を引き取ろうと寄ってくる中国人に、泣く泣く子供を託した人は多かった。そんな子供たちが戦後五十有余年たったとい

うのに、まだ身寄りさえ分からずにいるのである。私たちも、皆我身を守るのに精いっぱい、この悲惨な状態の難民に何の手助けもできなかった。いま、孤児についての新聞記事やテレビの映像を見るたびに、身を切られるような悲しみと歯がゆさが私の胸いっぱいに広がってくる。当時私たちも、ちょっとしたことと同じ運命をたどったかもしれないからである。

昭和二十一年の六月から七月にかけて、ぼつぼつと在満日本人の引揚げが開始されたが、引揚列車とは名前だけであって、運が良い人は有蓋貨車、外れた人たちは無蓋貨車であった。そんな貨車に、まるで家畜のように放り込まれ、悲惨きわまりない道中を強いられた。車中で力つきて、病気や栄養失調で死んだ人には、「鳥獣葬」があるだけであった。日本まで帰れた人々は、誠に強運というほかなかった。

終戦後、昭和二十一年四月中旬から五月中旬まで約一カ月間、昼夜の区別も無く蒋介石軍と中共軍との間で、激しい四平争奪戦がおこなわれた。最初は中共軍が四平を攻撃、次には蒋介石軍が奪還を図って反撃、

そしてまた中共軍というように攻守所を変えて、争奪戦が続いたのである。その間の日本人、中国人の苦勞と恐怖は、今では想像もできないくらい激しいものであった。四平会誌総集編の記事によると、約一カ月間にわたる激戦中、毎日平均して約千発の砲弾が市街地に撃ち込まれたと記載されている。

最初に、中共軍が寄せ集めの者たちに鉄砲を持たせて兵隊に仕立て、蒋介石の警察軍を一掃して、要所要所に拠点を築き駐留を始めた。蒋介石軍が、市の外周から密かに中共軍の拠点を包囲して、反撃を開始した。砲声はごうごうと鳴り響いた。主戦場になったのは、四平駅や市役所など、公共の建物が建ち並んでいる市の中心街であった。市街地の攻防が続き、多くの住民が使役にかり出され、いろいろな物品、資材の供出を強要された。多数の日本人、中国人に死者が出た。幸いというか、私は北の方の住宅に住んでいたので、砲声は終日聞いていたが戦闘の場面に巻き込まれた記憶は無い。

私の旧制中学校のクラス仲間の中国人の友人が、遼

陽市で内科の診療をしていた。この人は、日本語の通訳も兼ねていた。私が平成六（一九九四）年の五月に、その友人を訪ねて当時新しく建てられた遼陽駅で再会したとき、その友人が中国にはこんな小話があるんだよと話してくれた。「四平とは、四回も戦争の被害を受けて、なにも残さず平坦になってしまった所というんだ。蒋介石軍と中共軍との激しい四平争奪戦のときの砲撃で、建造物が崩れ落ち、のっぺらぼうになってしまった市街だから四平というんだ」と笑い話のごとくに言っていた。

私は昭和四年八月二十四日の夜明けに、福井県敦賀市の若狭湾に面して白壁の塀を巡らせた、古い武家屋敷の一角で生を受けた。私の記憶に今でも鮮明に残っているのは、家の近くに、森に囲まれた非常に壮大な神宮があったことである。それが元官幣大社氣比神宮であった。小学生のころ、兄や友人たちと一緒に神宮に行つては、森や境内を走り回ったり暴れたりしたものであった。夏は床下に潜り込んで涼を取り、広大な森の大木の下にごさを敷いて昼寝をしたりした。そんな意味でよくお世話になったものだ。

この氣比神宮にどうしても一度お礼を申し上げたくて、平成十一年に家族と一緒に参りしてきた。行つてみると、昭和二十年七月の敦賀大空襲のとき氣比神宮も焼失し、その後再建されたそうだが、規模は縮小されていて、かつての森や神宮をしのぶ面影は無くなってしまっていた。時というものは一瞬もとどまることなく過ぎ去り、それぞれの思い出や懐かしさを抱き込んで、忘却の彼方へ流し去ってしまう。まさに、往時茫茫といわれるとおりである。

父は、福井県敦賀市で旧国鉄の蒸気機関車の機関手として活躍していた。私の兄弟妹は五人で、私は三男であった。父親は働き盛りであり、当時流行していた海外雄飛の夢を実現したかったのであろう。国策や国鉄の奨励も相まって、狭い日本を飛び出す決心をしたと思う。広大な土地を持つ満州の南満州鉄道株式会社いろいろな好条件を呈示されて、就職することになった。渡満にあたり、Y県にある父母の実家の祖母や親戚に、満鉄に就職したことを報告に行き、先祖

代々の墓と氣比神宮にもお別れの参りをし、道中の平安と健康を祈願した。満州に出発する日がきた。まだ幼かった私は、何も知らずに喜々として両親に手を引かれ、敦賀を離れたのである。

最初に行ったのは、中国東北地方の四平街にある満鉄職員の社宅であった。社宅には、同じ様式の建物が何十棟と建ち並んでいた。現代風にいうならばマンションである。一棟の戸数も各戸の間取りも皆一緒で、私たちは社宅群の北の方の建物の二階に入居した。南の建物には、駅関係者が入っていた。社宅だから、もちろん満鉄に勤務している人ばかりで、先輩や同級生が多数いた。

二階の居間から眺める、夕方の景観は素晴らしかった。何一つ遮るものもなく、地と空の果てが一本の線になっていて、真っ赤に燃える太陽がその地の果てに静かに沈んでいく。だんだん空の色が変わっていき、遂に太陽が完全に地平線に隠れてしまう。真っ赤な残照が鮮やかであった。自然の雄大さと広大な土地の広さには、ただただ感動するだけで、私にとっては生涯

忘れることのできない光景である。

社宅の窓ガラスは、全部二重になっていた。もちろん寒気を防ぐためであるが、閉め切ると外の音が一切入らず、静かな生活ができた。トイレも、当時内地では見られない水洗で、大変清潔なものであった。ただ、内風呂がないのが難点であった。歩いて二分ほどの所に共同浴場があったので、冬場寒いときは大変だったが、帰りには濡れたタオルがすぐに凍って、棒のようなものが珍しくて面白かった。共同浴場を管理していた中国人の夫婦が、てん足であったのをよく覚えていた。

社宅に隣接して広々とした公園があり、遊具などもよく整備されていた。その公園の一角に、公衆電話のボックスがあった。本場の中国料理を食べたいと思ったときなど、駅前の大きな中国料理店に予約したり、注文したりするのに使えて便利だった。

夏は日本と違って、からからに乾燥したさわやかな風が網戸を通して入ってくるので、部屋にいる限り汗をかくこともなく、快適であった。しかし、五月下旬

から六月にかけて吹いてくる蒙古風には、どうしようもなく困った。空一面黄色の砂が吹きまくり、二重窓を閉め切っけていても、小麦粉のような黄砂が座敷の中に舞い込んできた。

冬は、外気温が氷点下二〇度を下回る厳寒であつても、スチーム暖房のお陰で室内は常時適温に維持された。暖房が始まる時のスチームを送るかすかな音がすると、暖房がくるぞくるぞと軽装で飛び跳ねたりした。スチーム暖房の無い社宅には、大きなペチカがでんと据えられていた。

その後、父親の勤務の都合で、更に機関区に近い社宅に移った。社宅は北五条通りの奥の方に新築されたばかりで、道路一つ隔てた向こうは韓国人や中国人の居住地で、ここが日本人が居住できる限界であつた。

社宅は、戸数二十戸ほどの一戸建て平屋で、新しく建てられたばかりであつた。今度は内風呂があつて、風呂桶はこれがまた鉄製の通称五右衛門風呂というものであつたのが、私には珍しく今でもよく思い出す。

私は、道路一つ隔てた中国人街の子供たちとすぐ仲

良くなった。そして、中国の子供たちに中国の遊びを教えてもらつて、一緒に遊んだ。子供だったためか、遊びながら中国語を覚えて、日常的な会話に不自由することはなかった。だからよく母親に頼まれて、父親愛飲の中国名産「パイ酎」を、近所の中国人が経営している酒屋まで買いに行った。

昭和十七年三月、第二十九期生として四平小学校を卒業、新設された旧制中学校に入学した。中学校は、小学校の校舎の一部を借りて開校されたが、校風は厳格であつた。

昭和十九年の末か、二十年の初めだったかはつきり覚えていないが、寒さの厳しい季節のことであつたのは間違いない。私と同級生二、三人が、海軍甲種予科飛行練習生第十五期生に応募して合格した。全満州の旧制中学校卒業生から三年生までの合格者が、特別列車に乗って日本に向かった。その人数は、少なくとも数千人を超えていたと思う。駅頭や沿線でも、日の丸の旗で送られた。それにしても、多数の若者が乗った輸送船が敵潜水艦に撃沈されずに、よく日本までた

どり着いたものだと思った。きっと、潜望鏡でのぞいた米兵が、坊主頭の少年を幼児と間違えたのかもしれないと思っ

私は、海軍甲種予科飛行練習生第十五期生として、鳥取県三保海軍航空隊基地に入隊したが、結果的には「予科練」最後の期となった。入隊後数日して、再度の厳密な身体検査があり、そこで軽度の近視があると指摘された。飛行兵にとっては体力も大切だが、眼もまた大切なのだ。こちらが見つかるとは前に敵機を発見し、攻撃に有利な位置に着けて敵を撃墜する。これが自分自身の生命を守り、戦に勝つ最良の方法である。良い目が絶対必要である。

検査終了後、医務士官に呼び出され、通信兵が整備兵としてならば適格だからどうかと言われたが、飛行兵を志願したのだからまた出直してきますと答えて、途中の危険を承知の上で満州に引き返すことにした。

なぜ飛行兵でなければ嫌だと、私が頑強に主張したのかというと、実は練習生の生活がとても耐えられそうになかったからである。移動はすべて駆け足、中で

も大変だったのがハンモックの取り出しと格納であった。自分の身長の数倍もあるハンモックを、格納場所から取り出して吊るしたり、ロープでハンモックを縛って格納するのだが、ロープが手に食い込んでとても痛い。ええ、力が弱くて固く縛れないのでハンモックが腰折れになってうまく入らず、やり直しを命じられるのがたまらなかったのである。まだまだ言いたいことがあるが、経験者にしか理解してもらえないだろうから割愛する。とにかく訓練生とその行動に自信が持てなくなり、嫌気がさしたのである。夜、巡検も終わりハンモックに潜り込み寝入る寸前に、窓いっばいに輝いている満月がだんだんと母の顔と重なって、月がぼやけて見えてきた。「あー、もうこんな生活はいやだ。とにかく父母のいる満州に帰りたい」というのが本音であった。

満州に帰るために乗る、釜山^{フゾ}ゆき貨物船の出航日の通知がなかったたので、隊舎での生活が続いていた。そんなある夜、練習生総員集合の号令がかかった。指定された場所に集合した。私たちの教育担当下士官はも

ちろん、他の下士官もたくさん集まっていたが、三十歳後半から四十歳前半の歴戦の猛者である下士官であった。その中の一人が突然大声で、「貴様たちは、全満から選抜され、伝統ある大日本帝国海軍の甲種練習生として入隊してきた以上は、規律は守らなければならぬ。食事は官食で、その他日用品は酒保で購入することに決まっている。貴様たちが満州から持参した品物すべてを、前に置いてある箱の中に入れる。もし今後の所持品検査で、満州から持って来た品物が残っていたら、それ相応の処罰をするからさよう心得よ！」とどなっていた。命令とあれば仕方がないので、隊舎に戻って持ち込み品全部をその箱の中に提出した。年長者の中には、たばこを何ケースも未練がましく箱に入れた人もいた。考えてみると、日本内地では食料品や日用品が極端に不足していたから、体の良い「物品収奪作戦」だったのかもしれない。ここには、以前から満州出身の先輩が入隊していたから、新しく入ってきた後輩たちがどんなものを持っているか、よく知っていたに違いない。

私たちは、専任下士官や教員たちの自慢話をよく聞かされた。彼らは、ミッドウェイ海戦やレイテ沖海戦で乗艦が沈没したり破損したりして、乗る艦がなくなり、甲練や乙練の教員に任命されたと話していた。たしかに彼らは筋金入りの猛者であり、気合が十分であったのは事実で、士官たちも一目置いていた。当時内地にいた士官といえは、速成教育を受けた学生出身の将校か、年配の上官だけだったので、こんな実戦経験の薄い士官にとって、善行章を何本もつけた筋金入りの下士官は煙たい存在であったと思う。

船の種類など詳しいことは分からなかったが、釜山へ行く船が入ったとの連絡があつて、私は上官室へ呼び出された。当直の年配の士官は、私の顔をつくづくと眺めながら「貴様は、本当に満州へ帰りたいのか？」とあきれたような顔で行った。年配の士官にも、私と同じくらいの年齢の子供がおられたのかもしれない。「今からでも遅くはないから、少年整備兵か、通信兵に志願して内地にいろ。命の保障だけはある程度できる。釜山に渡るには、敵潜水艦の密集地帯を航

海するので、あまりにも危険だ。もう一度考え直せ」と、年配の士官は大きな地図を前にして経路を詳細に説明しながら、基地に残ることを論してくれた。しかし、私は頑として満州へ帰ると主張した。少年の私がいあまりにも頑固なのに業を煮やし、苦虫をかみつぶしたような顔をして更に意見してくれたが、私は、たとえ途中が危険でも、ここで気に入らない生活をするよりも、父母のいる満州へ帰りたい気持ちでいっぱいであった。

乗船した地名も船の名前もすっかり忘れてしまったが、小さな貨物船だったように思う。当時の船に備え付けられていた救命胴衣は、二十四時間で浮力が無くなってしまふ程度のものであった。しかも真冬の海である。じたばたしても仕方がないと覚悟した。船員たちは一蓮托生だと思っていたからであろうか、やけに親切であった。そして私に、「絶対に船室に入っているはいけない。寒いだろうが甲板にいろ。船室にいて魚雷を食らったら、一発でお前の体は粉々になってしまうから」と忠告してくれた。忠告する方も、ほんの

気休めに言っただけかもしれない。

敵潜水艦の危険度は、入隊のときと同じであった。だが強運であったのか、無事対馬海峡を渡り、釜山に着いた。きつと魚雷一発にも値しな思つて、見逃してくれたのかもしれない。振り返ってみると、間一髪ということが度々あったが、何とか切り抜けてきた。対馬海峡を無事に渡ったあと、どのようにして朝鮮半島を北上したのか、すっかり記憶から抜けてしまっている。やつと四平の我が家にたどり着いたときには、母親がまず私の足元を見てから、徐々に目を上げて私の顔をしげしげと見つめたあとに、大きな声を出して泣き出したことだけは今でもはっきり覚えていゝる。飛行機乗りになるため自ら志願して、海軍航空隊に入るため家を出て、以来音信不通であった息子が前触れもなく突然無事に帰ってきたのを確認して、胸がいっぱいになったのであろう。神棚に陰膳が供えてあったのも、忘れられない思い出である。

以上のような経過をへて、私は終戦の日を四平の満鉄社宅の一室で迎えたのだった。

最近見たNHK取材班によるドキュメント番組の、「日米開戦勝算なし」によると、昭和十六年十二月八日のパールハーバー攻撃から始まった大東亜戦争の当初では、日米両国の国力の差は、主な戦力物資の生産高では日本の一に対して米国は七十八倍、石油に至っては、実に五百倍以上の開きがあったとのことである。まるで、「アリと象」のような力の差である。戦略物資の調達計画にかかわった元参謀の人は、「やっちゃえ、やっちゃえ」というような空気が満ち満ちているので、弱音を吐くわけにはいかないんですよ」と、異様な時代を振り返って言っていた。後先のことなどは考えずに、喧嘩を吹き掛けたようなものだ。当時の連合艦隊司令長官であった、山本五十六元帥も、「二年間ぐらいは何とか互角に勝負はできるが、その後の勝ち負けは保障できない」と言っていたが、機を見て、話し合いで戦いが収まるようにすることを希望していたのだった。だが当時の軍、特に陸軍は物資の不足分は、「大和魂」とか、「神風」とかの精神力という摩訶不思議なもので埋め合わせようとしていて、最後

にはあの悲劇的な「特攻」を生むことになったのだ。私は厳しい軍国主義の教育を受け、体の芯までたき込まれていて、海の藻くずになることも覚悟して予科練を志願した軍国少年であっただけに、思いもかけない敗戦、そしてその直後にあちこちで起きた、在留日本人にかかわる悲劇的な事案などを見聞きするうちに、精神的に錯乱状態に陥り、どうにも手がつけられないような荒れすさんだ状態になってしまった。年少にして、早々と人間の死の淵をのぞき見てしまった反動からであつたらう。

そんな心境になって無為な毎日を送っていたころ、ふと思ひ出したのが、当時中共軍に入っていた先輩のKさんのことであつた。どうせ一度は捨てた我が身だ、実戦とはいったいどの様なものか、一度体験するのも面白いではないかと、不遜極まりない考えがわいてきた。人間と人間との戦いの場で生と死を垣間見れば、今のこの荒れすさんだ心を何とか立て直すことができるのではないかと、自分で自分なりに解釈していたのだった。まかり間違えれば、命との引き換えにな

るかもしれないと一応の覚悟をして、Kさんの所屬している部隊に行き、Kさんを訪ねた。Kさんは大柄な人で、豪放らいらくな性格のうえ親分肌のところがあり、面倒見がよい人であった。中国語も堪能で、すっかり中共軍の兵士になりきっていた。

私はKさんのあとについて、部隊の内部を見て歩いていた。そのうちに、国府軍との戦闘にも参加するようになった。戦闘中は無我夢中であったが、激しい戦いが一段落し、戦死者や負傷者の後始末も終わり、ほっと一息ついた。「ああ！よくも負傷もせずに生き残ったものだ」と、我に帰って休んでいた。

そのうちに、「おれは鈴木という者だ」「私は小田だ」と、名乗ってくる日本兵だったらしき者が出てきた。出身地も告げていた。生きているという証を確かめるように話し始めた。ああ、これが戦いというものと実感し、改めて私も生きていることを無意識に確認して、武者震いが止まらなかった。

私の精神状態も、少しずつ正常になりつつあった。私がK先輩を訪ねて中共軍に行ったところは、中共軍が

国府軍を徐々に追いつめ始めた時期であったと思う。ざんごう掘りや砲弾運びなどの仕事を、後方で手伝っていたが、昼夜の別なく移動と射撃の連続であった。食べることなどは、すべて自給自足が原則だったので、生きていくこと自体が過酷な毎日であった。

あるときには、私の足元に転がっていた国府軍兵士の背中の袋の中に、かちかちに固まった饅頭が三個入っているのを見付け、それをもたらした。塩分がよくきいていて、私には二、三日分の食料として十分であった。また、別の兵士の肩に掛けていた水筒には飲み水が入っていたので、それで喉を潤した。戦死者の履いている靴が私のより良かったので、合掌してから取り替えた。平時では考えられないような非情な日常であったが、これが彼らの言う「自給自足」であった。

戦闘になると、奇妙な音を出しながら飛ぶ追撃砲弾、冷え切った空気を引き裂くような小銃弾、その音を聞きながら、もう少しずれたら私に当たるんだと漫然と考えていた。数メートル先で、倒れた同士の死体

を見ながら、「もうやめよう」という気になった。生と死が隣り合わせの極限の状態を体験して、過去の軍国教育と、敗戦後の現実との相違という精神的なかつとうが、氷解したような気がした。四平にいたときに、街外れに中国人墓地があったが、彼らは土葬であった。あるとき中共軍の兵士が、空き地の一角に深い大きな穴を掘っていた。兵士たちは何の感情も表さず淡々として作業を続け、掘りあげた穴に遺体を並べていた。こんなときも無表情なものであった。すべてが「戦争ぼけ」なのであろう。私も彼らと同じように、何の感情も悲哀も感じないようにになっていた。

ぼつぼつ中共軍ともおさらばしよう、そんな考えが浮かんできた。中共軍にしても、蔣介石軍を破り全土を支配する見込みが確実になってみると、員数そろえるために、今まで入隊を許していた民間人や、敗戦後行く先を失って流れ込んできた元日本兵は、共産主義を思想的に相容れないだろうから、ゆくゆくは重荷になると思っていたのは間違いないことである。私も、精神的な錯乱状態から抜け出せし、今が中共軍と手

を切って別れを告げる潮時だと思った。

K先輩にも気持ちをうち明け、中共軍を抜け出すことについて了解を得たので、夜陰に紛れてひそかに脱出を実行した。脱出することが中共軍に分かって、彼らはこれ幸いと思うだけだが、資産家や豪農の中には、中共軍の仕打ちを恨んでいる人たちがいたから、私が中共軍の脱走者と分かったらどんな仕返しをされるのか分からなかった。私としては、用心するに越したことはないと思ひ、中国服に身を包んで、自宅にも立ち寄らず友人宅を転々としていた。その友人にも、中共軍に入って参戦していたことなどは、一切話さなかった。

昭和二十一年夏のある日、中国人部落に行った帰りに昭平橋を渡っていたら、向こう側から来た母と妹にばったり出会ってしまった。私を捜していたのだ。母は、「日本への引揚げが近く始まることになっているのだから、お前も家に帰ってきて手伝うように」と言ったので、私は母のことを聞いて帰宅することにした。

家に帰るからにはこのままではいけないので、着いた中国服を脱ぎ、生やしていたひげもそり落とし、頭を丸めた。帰宅後は、引揚げ準備に没頭していた。乗船するまで随分待たされたが、昭和二十一年秋に引揚船は葫蘆島から出航した。船は米軍の艦船で、大竹に上陸した。

私は小さいときから、荒涼とした、どこまでも黄色の大地が果てしなく続く満州で育ったので、日本に帰って印象深かったのは、なんと緑の色濃い国だなということであった。他に特別な感慨はなく、ここが私を生んでくれた国かと思っただけだったが、両親はきつと懐かしさがいっぱいだったに違いない。広島市を通過したとき、がれきの山と化した見るも無残な街の姿を眺め、幾十万人々が負傷したり死亡したのかと思うと胸がつぶれ、勝ち目もないむちゃくちゃな戦争をしたものだと、呆然とホームに立ちつくした。

母の実家があるY県の村に身を寄せた。母の両親は当時健在であったので、食糧品などに困ることはなく、何かと世話になっていた。しばらくして、私は村

役場に就職したが、何となく物足りず、昭和二十四年三月に現在のTガス会社、T電力会社、N鋼管製鉄所の試験を受け全部合格したが、当時の治安状態や交通事情などを考えて、N鋼管の製鉄所に入社した。なにしろ製鉄所正門がプラットホームから見え、守衛が立番しているのだから、これほど安全なところはない。

入社以後は、所属部室の変更や仕事の内容が変わることはあったが、何とか無事に四十年間勤務して、昭和六十三年九月末口に定年退職した。

その間、四平小学校同窓会や、旧制中学校、旧制高等女学校の合同同窓会にも顔を出しているが、そのときには必ず、中共軍で私と一緒に歩き回っていたY先輩のことや、友人のE君の情報を聞いている。だが、毎回「行方不明」とか、「消息不明」としか返事が返ってこなかった。新聞紙上や、テレビで見える中国残留日本人孤児に関する記事や報道にも、よく目を通しているが、四平に住んでいたという孤児の記事を見たことはない。中国残留日本人孤児には、ソ連との国境に近い満州の奥地に住んでいた人が多く、四平付近に

いたという人はほとんどいない。その人たちの話す記事を読んだりしていると、今でも涙がこみあげてくる。

K先輩がもしも中国で健在ならば、七十六、七歳になつていと思う。日本での故郷がどこであるかも聞いていなかつたし、彼も話してはくれなかつた。中国を離れた私と、残つたK先輩、あのときの別々に選んだ決断が、その後のお互いの運命の分かれ道となつてしまつたのだ。今となつてはどうしようもないことだが、「諸行無常」という仏語をしみじみと感じる今日である。

満州で過ごした少年時代

神奈川県 岸 温

昭和八（一九三三）年三月、まだ吹く風の冷たい神戸港から、両親と五人の男の子の計七人の大家族は、連絡船の「うすり丸」に乗船して大連に渡つた。

当時父は、国鉄の仙台鉄道管理局内の塩釜線といわれていた東北本線の支線の終点である利府駅の駅長をしていたが、将来のことを考えて満鉄で働くことを希望して、満州に渡ることになつたのだ。従つて、私の出生地は利府駅の駅長官舎ということになる。

最初に赴任した所は、遼陽といわれる都市で、そこで約一年間にわたつて満鉄社員としての必要な教育を受けていた。妹はそこで生まれたが、初めての女の子であつたので、父母は大変な喜びであつたそうだ。

教育が終わつて、さらに現場教育を受けるため奉天（瀋陽）に移り、そこでまた、約一年間生活をした。約二年間の教育が終了して、やっと駅長としての独り歩きができるようになり、奉天から約一時間ぐらい北に行つた、得勝台という駅に駅長として赴任した。そのときには、長男十八歳、次男十六歳、三男十三歳、四男八歳、そして五男の私が五歳で、遼陽で生まれた妹は二歳になつていた。さらにこの駅長官舎で、末っ